研究計画書

研究テーマ：循環器病棟看護師の ACP に関する看護師の意識調査

Ⅰ．研究の背景

慢性心不全は急性増悪と寛解を繰り返しながら徐々に身体機能が低下し最期は急激に悪化するため予後予測が困難である。我が国においては、心不全患者に対する確立した緩和ケアのモデルはなく、緩和ケアに対する介入がほとんどされていないのが現状である。看護師は患者にもっと何か出来たのではないだろうか、苦しんでいる患者の苦痛をとるためにどのように関わったら良いのだろうかと悩み緩和ケアやスピリチュアルケアの知識、技術不足を感じている。

心不全領域の緩和ケアでは、近年アドバンス・ケア・プランニング(ACP)が重視されている。ACP とは「意志決定能力が低下する前に、患者や家族が望む治療と生き方を医療者が共有し、事前に対話しながら計画するプロセス全体」と定義されている。予後予測が困難な慢性心不全において、早期に ACP を行う事で増悪時に患者・家族が急速な決断を迫られることなく、彼らが望む治療・ケアを選択できるとされる。

A 病棟において、ACP チームを立ち上げ少しずつ ACP の必要性が浸透しつつある。しかし、急性期病棟のため入退院が激しく業務に追われてしまい患者・家族とのコミュニケーションの時間の確保が難しい。心不全における緩和ケアは、治療を諦めるものではなく患者・家族の QOL を改善するためのものであり、通常の心不全治療と並行して行われる。したがって、終末期に至ってから考慮するというよりも、早期の段階から導入することが望ましく、心不全ステージに関わらず心不全と診断されたときからの心不全緩和ケアの介入が望ましいと言われている。

本研究でアンケート調査を行い、A 病棟看護師の ACP に関する現状を明らかにし、今後の対策や課題を検討していくために、意義のある研究だと考える。介入出来ている項目に関しては継続していき、介入不足の項目に関しては勉強会など行って補っていけるように、次の取り組みに活かしていきたい。

Ⅱ．研究の目的

A 病棟における ACP に関する現状をアンケート調査を行い、今後の課題を明らかにする。

Ⅲ．研究の意義

アンケート調査を行うことで、A 病棟看護師の ACP 介入に関する現状を明らかにできる。また今後の対策や課題を検討できる。

Ⅳ. 研究方法

① 対象：JA 広島総合病院　東 3 階病棟に在籍する看護師 26 名(科長、研究実施担当者を除く)

② 研究期間：2023 年 12 月～2024 年 3 月

③ 実施場所：JA 広島総合病院　A 病棟

④ 調査方法：アンケート調査は、自記式質問紙調査とする

⑤ 調査項目：対象の基本属性(A 病棟看護師 26 人)
ACP 介入するまでの流れが分かるか
ACP アンケートを患者さんに実施したことがあるか
心不全患者・家族の情報収集について

Ⅴ. 倫理的配慮

倫理委員会の承認を得た後、対象者に研究の目的と方法、匿名性の保持と個人情報の保護、研究参加への自由意志ならびに途中辞退の保証、またその場合も不利益を生じないことについて書面と口頭で説明した上で開始する。研究の全過程において、研究参加の任意性、匿名性、安全性を確保し得られたデータは 5 年間厳重に管理する。その後適切な方法で破棄処理する。

Ⅵ. 文献

1) 急性・慢性心不全診療ガイドライン
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/naika/108/5/108_978/_pdf)

2) 渡邊梨紗,落合亮太,徳永友里,三條真紀子,眞茅みゆき,宮下光令,石川利之,渡部節子：慢性心不全患者とその家族と行うアドバンス・ケア・プランニングの必要性に関する循環器病棟に勤務する看護師の認識

3) 中村仁美,大竹瑛利,小林秀佳,四本竜一,藤井弥生：循環器病棟における心不全緩和ケアに対する看護師の認識についての実態調査